

こどもの感性にふれる

地域こども体験学習事業では、感動を生む体験、より本物に近い体験を通して、こどもたちの健全育成につながるよう、体験プログラムを実施しています。

「知ってるわ〜」

こどもたちが何か新しい出来事に出合った時、よく聞かれる言葉です。

自分は他のこどもたちとはちょっと違うことを示し、自分の存在を際立てようという小さな気持ちが働くのです。「ネタがあるんやで」マジックショーでは、こう言うこどもがたいていいます。

本当は悪気もなく、ショーを壊そうというつもりもないのですが、自分の存在を知ってほしくて、つい出てしまうひとことです。

そこで大人は「黙って見なさい！」などと、叱りたくなってしまいます。

「あくまでもあたたかく」

マジックの講師は、こどもたちがどんなに騒いでも、あくまでマジックを通して楽しい時間を過ごすことに集中します。

やがて、自分の周りのこどもたちがマジックショーに集中しているのがわかったとき、さっきまで「知ってるわ」と言い続けていたこどもも、サッと手をあげて、講師の誘いで舞台上がって、マジックを楽しみだします。そして一緒に楽しんだあと、最後はみんなで大きな拍手をして終わります。



「プロとして、人と交わる」

講師はプロとして、マジックの技術を磨くと同時に、人との接しかたについても技術を高めてきました。こどもたちに対しても、先入観で評価することなく、本当の気持ちを知り、一緒に感動をしようと接することを心掛けています。



「おもんなあ」

ある団体が「南京たますだれ」の体験講座を利用された時のこと。

小学高学年の三人組の男子が「なんで、しなあかんねん」と、指導者の指示で一応整列はしたものの、仲間うち同士で話をし続けるわ、寝転がるわ、だれが見ても閉口する、そんな態度でした。指導者も「ちゃんとしなさい」とは言うけど、なかなか指導が入りません。

「うまいねえ、どこで覚えたん？」

さて、講座が始まりました。最初に講師が「ちょっと前に出てきて、この鐘、叩いてくれへんかなあ」と、三人組で中心と思われる一人を、舞台に引っ張りだし、衣装を着せて、鐘を持ってもらいました。体力もあるこどもですから、叩く鐘の音は大きく、リズムもはっきりしています。講師は「うまいねえ」と、そのこをいっぱいほめました。

実際に上手でしたし、全員でその鐘のリズムで手拍子をたたき出すと、だんだん楽しさが増してきました。

次は二人目のこども。今度は「見本になって」と、前に立たせ、玉すだれを持ってもらいました。すると、どうしたとか、あんなに嫌がる様子を見せていたのに、講師と一緒にいきなり踊りだしました。しかも、ちゃんと形になっています。

「空気を読む」

講師は全体の雰囲気をつかんで、どうすれば体験講座が楽しいものになるか、瞬時に判断し、そして、プロとしての力を発揮し、体験の楽しさをこどもたちに伝えます。

この時「ちゃんとしなさい」としかりつけるだけでは、こども自身も存在を認められえない、楽しさも受け取れなくなってしまいます。

「こどもの世界を大切に」

新しい体験を始める時、「おもしろくないから」というこどもがいますが、わからないことができるかどうかの不安、失敗したときに非難されることへの不安があるのだと思います。

地域こども体験学習事業の講師は、こども一人一人が自分なりの世界で、自分なりのペースで楽しめる環境づくり、そして、一人ひとりをきちんと評価することを考えています。

「こどものペースを大切に、できたときはしっかりほめる。」

小さな体験を通して、そういう大切なことを実感できるのが、地域こども体験学習事業です。

